
俺は弟に恋をする。

天照

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は弟に恋をする。

【Nコード】

N5657M

【作者名】

天照

【あらすじ】

同性で、血の繋がった実の兄弟で……
許されないことだと分かっている。
きつと受け入れてもらえない。きつと認めてもらえない。
それでも、こんなにも好きで。自分以上に大切だと思う。
この気持ちはどうしようもない……。

正造、由紀、秋子は三人兄弟。母子家庭で育ったこともあり、三人

で寄り添い助け合いながら育ったため、とても仲の良い兄弟だった。そのおかげで、長男の正造はブラコンでシスコン。弟と妹を異常に可愛がってはいたが、あくまで仲の良い兄弟だった。弟とキスをするその日までは。

最初は酔った勢いの小さな出来事。だが、それが抑えられていた思いを加速させ、その日を境に兄と弟は一線を越え始める。

ノンフィクション。

キス（前書き）

この作品には男性同士・肉親同士の恋愛描写がありますので、苦手な方はご注意ください。

キス

> i 9 1 8 5 — 1 3 7 7 <

誰にもこんなことは話せないし、相談なんてできない。せめて血が繋がってなかったら、できれば女の子だったなら……なんて現実逃避してる。

始まりは十二月のこと。飲み会帰りの夜遅く、時計の針が午前二時を過ぎようとする頃、ようやく俺は家へと帰った。

春から始まる就職活動に対する不安からか、つい飲み過ぎてしまったのだが、玄関先で大騒ぎをしてしまっても、優しい弟はいつものように俺を出迎えて介抱してくれた。そしてそのまま酒盛りの雰囲気になり、弟の部屋で二人で飲むことになった。

由紀は毒舌ゆづきだけど憎めない奴で、甲斐甲斐しくこうして酔っ払った俺の面倒を見てくれる、可愛い弟だ。

二人で他愛もない話をしながらビールの缶を五つ六つほど空け、なんとなくつけっぱなしにしていたテレビの深夜番組を見ると、ゲイのお姉さんたちが登場して盛り上がる場面に。そこから自然と話題はゲイってありか？という話になった。

もちろん合わせたようにナシだって話になったし、由紀は何度も「そんなキモいのありえない」と繰り返していた。

だが、もともとブラコンだった俺は、酔っていたこともあり、酒で頬を赤く染めた弟を可愛いと思った。単純な人間なので、思ったことが口から全部出てくる出てくる。

「お前可愛いな」

「兄ちゃんはいつもそれだな」

笑いながら由紀はさらりと受け流したが、酔っ払ってる俺はさらに続けた。

「いやいや、マジで今日は可愛い。そこら辺の女子より可愛い。どうしてくれようか」

女よりも男に告白される回数が多い高校二年の弟は、身長が俺より二十センチ近く小さいし、体も細身で柔らかい。俺なんかとは違って、本当に女の子のように整った可愛い顔立ちをしている。ちなみに俺はイケメンじゃないし、残念なことにいまだ告白されたこともない。兄弟でこの違いはなんなんだ、と思うことしきりだ。

「あははは、どうしてくれんの？」

「キスしてやんよ」

もともと飲んでいた上にさらにアルコールを追加した俺のテンションは最高潮。なんでも出来る気分だった。

「え、マジかよ。童貞のくせしてできんのかよ」

お互いのことをよく知っている兄弟ならではの的確なツッコみに若干へこみつつも、強引に肩を抱き寄せて顔を近づける。

「してやんよ。オラオラ、こっちに来いや」

「ふざけんなよー。男なんて気持ち悪い、兄ちゃんなら更にキモい」

抵抗して体を引き離そうとするが、その肩はがっちりと掴まれ放されることはない。

更に近づく俺、面倒になって離れるのをやめる弟。重なる視線、

重なる吐息。そして……

キスをしてしまった。後に聞いたところによると、どうやらファーストキスだったらしい。余談だが、俺のファーストキスは合コンで酔った勢いに任せてたまたま隣に座っていた女の子としたもので、酒席では何度か友達とキスしたことがある。それも男女構わずに。きっと酔うとキス魔になるんだと思う。

冷や水を打ったように静かになる室内。由紀がびくりした顔をこちらを見ている。黒くて大きな瞳が俺を見つめていて、心なしか潤んでいるようにも見えた。頬を桜色に染めて、じっと俺を……。

まっすぐに結ばれた唇は厚ぼったく熟していて、それを見て思わずもう一度キスをする。

もうテレビの番組なんかとづくに終わっていて、あの虹色の縦縞の画面に切り替わっていた。由紀はちよつと泣きそうになっていたし、正気に戻った俺も涙目だった。血の繋がった兄弟にキスしたのだから、酔いも醒める。

「……」

「……なんというか、すまなかった」

顔を背ける弟。淀んだ空気に死にそうな俺。こんな時でも膝をじっと見つめるその様子を愛おしく感じて、再び湧き上がる気持ちを抑えるのに苦労した。

「兄ちゃんはさ、そういう人なの？」

「それってどういう……」

すると弟は少し怒ったように答える。

「平気で兄弟にキスできるヤツなのかってこと。まさかあーちゃん

にもしてんの？」

あーちゃんというのは由紀より一歳年下の妹、秋子のこと。俺たちは三人兄弟で片親だった上にその親も年中働き通し。小さい頃から三人でいることが多かったから、自然と兄弟を思う気持ちが強くなった。俺が守ってあげないと、という使命感に燃えていた。

そんな訳でシスコンでもある俺は、妹のこともちろん可愛いと思うし大好きだったが、当然キスなんてしたことないし、しようと思っただけでもない。

「まさか！それはねえよ！」

だから全力で否定した。

「ならいい」

そうそっけなく言うと、由紀は再び視線を逸らす。

そんな弟を前にして、俺は横目で壁にかかった時計を見ながら、内心焦っていた。それも先ほどのキスとは別のことで。

実は、次の日朝早くからバイトがあり、できればそろそろ部屋に戻って眠りたかったのだが、なんとも気まずい雰囲気で、とてもそんな状況じゃなかった。部屋に戻ったとしても、翌朝起きてどう顔を合わせればいいのかと悩んでいたのだが……。

かなり目が泳いでいたんだと思う。そんな俺を見かねたのか、ふと笑顔を見せた由紀が言った。

「戻ればいいじゃん。俺は今日は徹夜するから、気にしないで寝りゃいいよ」

「うそ、マジ。サンキュ」

助かった。そう思い回復したテンションで、立ち上がり意気揚々と部屋に戻ろうとすると、由紀も立ち上がった俺を見上げるもんだから、なんだろうと思ひ視線を合わせた。

まだ酒の残り香が弟にはあつて、妙に色香があるというか、ほったもほんのりと赤かったし、可愛かった。思わずその姿を見てぼんやりしてしまう。

「馬鹿だな兄ちゃん、カワイイ」

するとそういつて、今度は由紀の方からキスをしてきたのだ。

もう何も言えない。頭の中が真っ白になった。思考停止。こういう時に「お前の方が可愛いよ」なんて言えないから、俺は童貞なのかもしれない。

「兄ちゃん俺のこと可愛いって言うけどさ。兄ちゃんの方が可愛いよ。なんで人がほっとくのかって思うくらいに」

弟はまだ酔ってるのかもしれない。そんな恥ずかしい台詞を実の兄に言えるくらいだから。

「カワイイよ、兄ちゃん。……だいすき」

そういつて俺を抱きしめた由紀は、再び唇を重ねてきた。

本当に驚いてなんにもできなくて固まっていた俺だったが、その夜はそれ以上は何事もなく、すぐに部屋へと戻って寝た。その時はそれで終わりだと思っていた。

翌日の朝八時。セツトした目覚まし時計がけたたましく鳴り響く。

「……クソ頭痛ええ」

二日酔いの痛みをうまく例えることは難しい。経験した人なら分かるかもしれないが、ただでさえうるさい音が余計に大きく感じられる。ガンガンと頭を打ち付けられるようなあの感じ。とにかく朝から気分は最悪だった。

まあ、それはともかく。目覚ましの音を聞いて、弟が俺を起こしに部屋へ入ってきたのだが……

「おはよう兄ちゃん」

そう言うやいなや、なんといきなり笑顔で目覚めのキスをしてきたのだ。漫画やゲームならともかく、まさか実際にそんな体験をするとは思わなかった。しかも血の繋がった弟相手に。

そしてその日から、俺たちの誰にも言えない秘密の関係が始まった。

変化

妹がいる時は三人で過ごしているが、部活で遅いことが多いから基本的に弟と二人でいる時間が長い。朝は由紀の……ゆうちゃんの口付けで起こされ、妹や親の目を盗んで色々な場所で唇を重ねた。夜は一緒に布団で寝た。ただ、あくまでキスだけの清い付き合いだった。

二週間ほどで俺にも弟とキスするとか抱きしめるという行為に違和感がなくなってきた。もしかしたら流されやすいのかもしれない。そして小柄で可愛い弟は、俺のことを「兄ちゃん」ではなく「しようちん」と呼ぶようになった。

しばらくはそうやって付き合ってきた俺たちだったが……それは三月の初め、いつものようにベッドの上で抱き合いながらイヤイヤしていた時のこと。なんと突然、弟に押し倒されたのだ。正直、弟と一緒にベッドで寝ている時も勃起なんてしなかったし、自分をする時ももっぱら女性をオカズにしていた。弟でそういうことを想像すると悪い気がして試したことはない。

だが、由紀は違っていた。たまに起^たつてるのはなんとなく分かってたし、俺に欲情してるのも感じていた。

「ちょ……」

「しようちん、しよつ」

目がマジだった。本気で俺は犯されと思った。

「無理無理、男同士だろう」

それを聞いた弟は、俺の股間の上で泣き出してしまった。

これまで何度もキスをしておいて、今更そんな理由で拒否するのはおかしいだろうと、自分でも後になって思う。その時の俺は才口オロして、とにかく慰めるようにキスしてた。

我慢強い弟で、これまで絶対に弱いところを見せようとはしなかったから、そんな由紀が泣き出してしまっただけに驚いてうろたえてしまったのだ。

「しょうちゃんはこうして俺にキスしたりするんだよ……」

「それはお前が好きだから……」

「違うだろ！しょうちゃんは俺のことなんか、どうせ可愛い弟にしか思っていないだろ！」

涙をぼろぼろこぼす弟を抱きしめることしかできない。どうすればいいんだよ……そう誰にともなく心の中でつぶやいた。

深夜二時くらいまで由紀はずっと泣き続けていた。俺は慰める言葉も使い果たして、背中をずっと撫でていた。ようやく泣き止んだ時に「ごめんな」と無理して笑ったから、つられて俺まで泣きそうになる。

それなのに、翌日にはいつもの弟に戻っていた。昨日のことなんて何もなかったかのように振舞うその姿に、思わず胸が痛んだ。

本当に、あの可愛い弟を苦しめてる俺はどうかしてる。ただでさえ悩み多き年頃なのに。

由紀が俺を「しょうちゃん」と呼ぶのだって、兄弟という意識から離れようとしてのことなんだろう。妹と話している時は俺のことを「兄ちゃん」って呼ぶのだが、恋人モードの時は目が違う。上手く言えないが、俺を見るとぱあって表情が変わる。明るくなる。「あ、俺恋されてる。」って実感する。

俺も弟が……ゆうちゃんが好きだ。でもこれは愛情ではあるけれど、恋愛感情なのか肉親としての愛なのかは微妙だ。由紀に「だいすき」と言われる度に、嬉しい反面困ってしまう自分がいる。

苦悩

俺はどうしたらいいのだろうか。この通り俺は駄目人間で、弟は実は奨学金で学校に通ってるような秀才で、彼の将来を考えるとこのままじゃいけないと思う。

兄弟間で恋愛ってさ、本当にきついんだ。よくドラマなんかでそういう話があるけど、実際その立場になると精神的に辛くてたまらない。同じ屋根の下で暮らし育ったからお互いの小さい頃も熟知してるし、そもそも血が繋がってるんだ。

肉親同士の、兄弟同士の恋愛がタブーであるということを、身をもって知った。

深入りは怖くて、やめるのは今だと分かってる。でも……甘えられるのが気持ちよくてやめられないのか、弟が傷ついて泣く姿が見たくないからなのか。愛想尽かされて見捨てられるのは怖いけど、でもそれ以上にずるずると関係を発展させるのも怖い。本当に由紀には悪いと思ってる。

俺たち三人兄弟の父親は、俺が八歳の時に失踪した。もともと半年に一度帰ってくるかどうかって人だったから、俺たち兄弟は別に悲しいとか寂しいだなんて思わなかった。

ただ、仕事も何もかも放り出して蒸発したから収入源は断たれた。借金を置いていかなかったことだけはありがたいというべきか、不幸中の幸いか。

三兄弟を育てるために母さんは昼夜問わず働き出し、今も俺たちのために一生懸命夜遅くまで働いてくれている。

その当時の俺は長男のくせして甘ったれで、夜になると怖くなって泣いていた。父親のことは親戚の噂話で知っていたから、母さんまでいなくなってしまうんじゃないかと不安になっていたんだと思

う。そうして泣いていると、二人のチビたちが寄ってきて俺をぎゅーってしてくれるんだ。まだミルクの匂いがするのに、「兄ちゃん大丈夫？」って気遣って尋ねてくるんだ。妹なんかオムツも外れてないのに……今考えると本当に情けない。

だから、より兄弟の絆が深いというか、そんじょそこらの兄弟より仲は良いと自負してる。

小さい頃は「兄ちゃん」って俺にくっついて離れなかったり、兄弟三人で狭い浴槽に浸かったこと、俺がフラれて泣いてたら慰めてくれたこととか、綺麗な思い出がいっぱいある。弟とキスしたり抱き合ったりすると、その思い出を踏みにじってる気がするんだ。

同じではないけれど、母親とよく似た弟の顔、俺と同じ髪や瞳の色。それが嫌で、お洒落なんて考えてもいなかった俺が、髪型を変えて髪も染めて、伊達眼鏡までかけた。

由紀と兄弟なんだ、と思いつく度に吐き気がおさまらない。最近では楽になってきたけど、弟がニコニコ笑ってるのを見ると、たまに小さい頃の笑顔と重なって罪悪感でいっぱいになる。

妹を含めて、兄弟三人で話していると幸せなんだ。でも、その普通の幸福に押しつぶされそうになる。兄弟でキスしたりしてるわけだから。

せめて妹がこの関係を知らずにすむことを望みたい。そして、由紀は俺以上に悩んでるだろうと思うといたたまれない。

男と恋愛はないとあいつは以前言っていたけど、建前か本音かは分からない。自惚れみたいだけど、俺だけ特別だったのか。正直どうして俺みたいな男に惚れたのかは分からないが、多分弟は最初のキスのもっと以前から俺に恋心を抱いていたんだと思う。

由紀は、自分の気持ちが果たして愛なのか恋なのかすら分かってない俺よりも確実に自分の気持ちを分かっている、俺以上に参っていると思う。

傷つけないでこの関係を終わりにすることはできないと思うけど、弟のためにも、その傷が最小限ですむ言葉がないか……それを探していた。

痛み

泣かせてしまった日から一週間が過ぎたが、いくら考えても最適な言葉は見つからなかった。

でも、色々と悩みぬいた結果、ゆうちゃんを大切にするし幸せになってもらいたい。そのためにはきちんと「もうやめよう」って言うべきなんだと……そう思うようになっていた。

弟には普通の人生を歩んで欲しい。少なくとも俺なんかと付き合いよりも、他の男と付き合う方がよっぽどいい。ゲイであっても、自分よりはるかにまともな人生を送れると思うから。

そして、お互いが休みで家にいるその日、ついに別れを切り出すことを決意した。

部屋に入った時、由紀は読んでいた漫画を放り投げて俺に抱きついてきた。擦り寄ってきて、まるで子犬のように可愛かった。

なかなか切り出すことが出来なかったけれど、意を決し、思い切って口にした。「もうこの関係やめよう」って。

しっぽを振らんばかりに懷いて擦り寄ってきた弟の顔が、俺を見上げて、カッと目を見開いて、とても不安そうな表情を浮かべる。

「どうして」

そう聞いてきた。そして後は何も言わず、ただこちらを見つめたまま……。段々と目が潤んできて。無言のまま、流れる涙を拭おうともせずにそのまま泣いていた。そして俺の胸にしがみついていた。シャツ一枚だったから、涙が染み込んで濡れてきて、この肌で弟の気持ちを感じてた。……ずっと泣いているのを。ひんやりとした感触が、心の奥まで冷たくひやしていくようだった。

覚悟してたけど、こんなに泣かせるとは思わなくて。でも、抱きしめたら駄目な気がして。視線のやり場に困って、ベッドの上に放り出されていた漫画を見つめてた。

そしたら弟が、ふっと涙でぐちゃぐちゃになった顔を上げた。目は真っ赤でまぶたも腫れぼつたくなって、鼻まで赤くして。それを見て、本当に心が痛んだ。

「なんでさ、俺たち兄弟なんだろう。どうして……兄弟なの。それとも男だから？ あーちゃんならいいの？」

その問いかけに答えることができないまま、その場に立ち尽くしたまま、何も出来なかった。その時、俺はずっと心の中で「どうしてこんな可愛い弟を泣かせてるんだ」って自問してた。

俺、兄なのに、弟に、何も、してやれない。俺も一緒になって泣いたんだ。ごめんなって、ずっと馬鹿みたいに言ってた。

ごめんな、ゆうちゃん、ごめんな。俺が兄に生まれて本当にごめんな。

どうしたらいいんだろう。こんなに弟泣かせて、何したいんだろう。どうして俺ら兄弟なんだろう。

父親がいなくなって、家が貧乏になっても、生まれてきたことを恨んだことはなかった。

どうして、俺、生まれてきたんだろ。

それからすぐに出て行つてと言われた。抵抗したが出て行けつて泣きながら怒鳴られて、仕方なく自分の部屋へ戻った俺は、言ってしまったことをものすごく後悔した。始めにキスしたのも俺、こうして別れを切り出したのも俺。本当に自分本位で自己中なのは分か

ってる。

それでも、できるなら弟にはまっとうな人生を歩いて欲しいし、普通に幸せになってもらいたい。そのために自分ができることを考えに考えた上での選択であり、行動だった。それなのに、これほどまでに泣かせてしまった。きっと深く傷つけてしまった。

焦らなければよかった。来月から由紀が予備校に通い始めるから、切り出すなら受験前にと考えていたし、このままだともう戻れないところまで行ってしまいそうだったから、今しかない……そう思っていたけれど。

もっと段階を踏んでから話をすればよかった。自分では時間をかけたつもりだったが、もっともっとかければよかった。

本当に本当に、悩んで、悩みぬいて……自分だけで抱え込んで冗談抜きで、いつそ死んでしまいたいと思うようになっていた。

自己嫌悪と罪悪感でいっぱいになっていた俺は、ポケットに忍ばせておいたピンをぎゅっと握り締めた。

揺れる心

泣いている顔が忘れられなくて、更に弟を傷つけるんじゃないかって不安になって。それでもこのままではいけないと思い、一時間ほど経ってから様子を見に行った。幸い妹は今日は遅くなると連絡があったので、まだ粘るつもりだった。妹にはこんな泣きはらした顔は見せられない。

だが、部屋に行っても由紀はドアの鍵を開けてくれなかった。名前を呼んでも返事をしてくれなかった。

でも、ドア越しにすすり泣きが聞こえてきて……ドアの前で立ち尽くしていると、中から「ひとりにしてほしいから」と言われた。喉から絞り出すような声で。

結局俺は、その声から逃げるように自分の部屋へ戻った。

俺、本当に何してんだろ。どうしてこんなに弟泣かせてるんだろうつて、もう何度目か分からない問いを自分自身に繰り返した。

どうしたらいいのか分からなくて、こんな意志薄弱な兄で、由紀には申し訳なくて仕方ない。俺が責任取らなくちゃいけない。一番辛いのはきつとあいつだから。

メールしたら見てくれるかな。そう思って、弟の携帯に送信してみる。

「出てきてみて。夕飯の支度一緒にしよう?」

するとほどなく返事が来た。

「顔崩れてるからヤダ」

きつと泣いてぐちゃぐちゃになった顔を見せたくないんだろう。
そのままでも充分可愛いのに。

台所までおいでと打ってみたが、どうしても今は部屋から出たくないようで、断られてしまった。夕飯は牛丼でいいとメールがきたので、ひとまず近くの店まで買い物に行くことにした。

「ただいまー」

道中色々と頭の中で考えながらの外出だったので、気がつくところという間に家へと着いてしまっていた。

「おかえりー」

由紀は部屋から出てきて居間でテレビを見ていた。

「おつ、おう！ただいま」

「お腹あんまり空いてないから後で食べようぜ」
「あ、ああ」

俺はかなりもって挙動不審になってしまったが、弟はいたって普通の反応だった。差し障りないってやつ？気丈な奴め……。

畳に転がりながらニュースを見ている由紀。こうして見てみると、体は細いし、可愛いし、なんだかんだ言って性格は良いし、恋人なんてすぐに見つかると思うんだよな。これでお互いに他人で、さらに由紀が女の子だったら……。そういう想像を、ついしてしまう。

弟や妹が泣くのは辛い。以前妹が失恋してきて泣いていた時は、由紀と二人でオロオロしていた。秋子を振った男を思い切り問い詰

めてやりたいと思った。弟を傷つけた俺も同罪だが、もうこれ以上泣かせたくはない。

このままなかったことにした方がいいのかもしれない。前みたいに、泥酔した俺を弟が介抱してくれるような、あの頃の感じに戻ればいい。仲の良い兄弟だったあの頃に……。

だいぶ冷静になってきた俺は、そんなことを考え始めていた。

自覚

「朝青龍って真面目に稽古しただけでも話題になるんだよな。かわいそう」

弟はニユースを見ながら、ごく自然に話しかけてくる。

「でも三、四時間連続筋トレとか俺だったら死ぬぞ」

だから俺もできるだけ自然に、いつも通りに答えることにした。

「そりゃ、しょうちゃんが運動不足だから。そのくせに痩せすぎだろう」

「お前もな」

「しょうちゃんより皮下脂肪ある自信あるよ」

毒舌だが、やっぱり弟は可愛い。そろそろいいかと思い、夕食に買ってきた牛丼を出してきて、二人で食べることにした。

最初は普通に会話してたんだ。皮下脂肪について、俺らジム行って筋肉つけてみようぜってなって、だったら皮下脂肪は減るだろうって話になって。まあ他愛もない話だったんだ。

「そろそろあーちゃんかえってくるかなー、時間遅いよ」

俺は壁にかかった時計を見ながら言う。

「んな早くねえよ、花の女子高生なんだぜ？」

「そうだよなー、でもあーちゃん可愛いから変な男にナンパされな

いか心配」

すると、由紀は笑いながら俺に聞いた。

「俺はどうよ？」

本当に自然に、笑いながらそう尋ねてくるもんだから、地雷って分かっていても、俺は答えた。

「お前もすっげえ心配。可愛いんだもん。大好きだよ、ゆうちゃん」

由紀、泣きながら飯食ってた。俺の牛丼もしょっぱかった。塩かけすぎじゃねえの、吉野家……。

あれ……俺、本当に何してんだろ。どうやら俺は、弟のことが本当に好きみたいなんだ。

涙ぼろぼろ零してるのに、一生懸命にそれをこらえて飯を食ってる弟の姿を見て、健気でいたたまれなくなつて。どうしようかと思つてとりあえず手を握ったら、びっくりした顔をされた。

「いいのかよ。しょうちゃんは女が好きなんだろ？」

「ゆうちゃんの方が大切だから」

それでも由紀は興奮して、さらにまくし立てる

「ふざけるなよ！俺は男で、弟なんだ。俺はしょうちゃんが一番に
は……」

「うん」

まっすぐに見つめる俺を見て、ゆうちゃんは口をつぐむ。

「ごめん……。俺もしょうちゃんのこと好きだよ」

ボソッとそう言って、その後はただ静かに飯を食べていた。

俺は、弟とこのまま行くところまで行ってもいいかもしれないと思った。

決意

どうして俺ら兄弟なんだろうな。しかも男同士。どうしてどうしてって考えると、神様ってやつが本当に憎くなる。

今日は三年分くらい弟を泣かせた。ごめん。こんな駄目人間でごめん。俺は弟と付き合うことにする。弟が本当に必要だよ。誰よりも好きだよ。誰よりも幸せでいてくれよ、ゆうちゃん。

はじめはきちんとつけようと思う。新しくやり直すために、この思いをしっかりと言葉にするために、これから何を言うべきか考えないと……。

まず、きちんと気持ちを伝える。ゆうちゃんが大好きで、ずっと傍にいたいということ。

そしてそこに至るまでの経緯を説明する。始めは別れようと思ってたこと。でも色々考えて、感じて、自分でこの気持ちを確認して、やっぱり好きだと思ったこと。

それから最後に、やっぱり今はまだセックスはできない。俺が価値観を受け入れられるまで待っていてほしい、ということ。お前のことは好きだけどセックスは駄目って、すごい自分に都合のいい考えで、勝手すぎると思う。でも弟とすると俺は罪悪感で自殺しかないから、それだけは待っていてもらいたい。以前ディープキスをした時だって、吐きそうになっただけだから。

気持ちはあっても、体がまだ受け入れようとしていない現状で、やはりそれは難しい……と思う。

夕食も終わり、自分の部屋へ戻って漫画を読んでいた弟は、部屋に入ってきた俺に少し驚いていた。そのびくつとした反応が可愛らしくて、思わず笑ってしまう。

「……」

無言で見つめられ、なんだか緊張するような恥ずかしいような、なんとも言いづらい雰囲気だ。

でも、言わなきゃ伝わらないわけで。先ほど考えた内容を思い返しながら口を開いた。

「好き……なんだが」

「ありがと」

なんともそっけない返事。弟はきょとんとした顔をしていた。

「うん……」

どうもこういうシチュエーションでこういうことを言うのに慣れていない俺は、どうしても上手く口から言葉が出てこない。とにかく、自分の思いをなんとか説明することにした。

「お前と一度やりかけただろ？俺さ、その時やるのは流石にないと思った」

「……」

弟は何も言わずに俺の話に耳を傾けている。

「でさ、色々考えた。お前が大好きだから、ゆうちゃんが大好きだからさ。お前が幸せになる方法を探した」

「……」

「俺みたいな駄目人間なんかと一緒にいるより、他の人が良いと……そう思ったんだ。だから別れようって言ったんだ」

「……うん」

俺の言葉を聞いて、弟はゆっくりと頷く。

「でも、言った後にすげえ後悔したんだ。お前が泣いたのを見て、俺は何もしてやれないって。俺が求めてたのはこんなものだったの
かって」

「……」

視線を逸らさずに、俺は続けた。

「お前が離れてくのを感じて、だから俺、すごく苦しくて。俺には
ゆうちゃんが必要って分かって」

すると、俺の言葉をさえぎるように由紀が言った。

「しょうちゃんは俺が好き？」

「ああ、好きだよ」

それを聞いて、弟も笑顔で言う。

「俺も大好き」

少し照れるが、本当に嬉しかった。お互いにちゃんと思ひ合えた
ということだ。

口下手な俺は上手く伝えることができないし、優柔不断で本当に
駄目な兄貴で、ここまで来るのに随分と時間がかかってしまったけ
れども。

「でもさ、俺童貞だからセックスは駄目。下手糞だから」

「素直に言えはいいものを……」

当然俺のそんな言い訳など、弟は見抜いているようだ。

「はい、すみません。半分の本音です、半音です」

うなだれる俺に、弟は優しく微笑んだま言った。

「兄弟だから、だろ」

やはり賢い、ちゃんと分かっている。……まあ当然か。へたれな俺は、なかなかそれだけは言いづらくて。お前に言わせてごめんよ。

「時間はかかると思う。でもさ、お前が嫌いってわけじゃない。そこら辺は勘違いすんなよ」

「キスはいいの？」

「オーケー」

返事を聞くのが早いか、顔を寄せてきて素早くキスをしてきた。そんな由紀がたまらなく愛しい。

全て言い終わった後、思わず俺たちはその場にへたり込んでしまった。

「ふー、久々に心底疲れた」

「この駄目人間が」

由紀がベッドに転がった俺の腹をぱんぱんしてくる。その目には涙が溜まっていたが、俺はあえて何も言わなかった。

「しょうちゃんは俺のこと好き？」

「大好きだよ、可愛いゆうちゃん」

それを聞いて本当に嬉しそうに笑いながら、俺の隣に寝そべってくる。

「大好きだよ、しょうちゃん。……奇跡みたい。今なら神様を信じられるかも」

「このキリシタンが」

「ちげえよ、俺はただ嬉しいだけ。しょうちゃん好きなだけ」

そう言っただけ俺の首元に顔を埋めてきたんだが、由紀はちよっぴり泣いていた。その涙でまたシャツが湿った。

本当に今日はよく泣いてるな。思わずその頭を思い切り抱きしめた。

秘めた思い

兄貴は昔から優しいだけの駄目人間だった。優しさだけじゃ世の中生きられないもんな。

兄貴が大学入ってすぐだったと思う。ふられたーって泣いて帰ってきた。ふられたくらいで泣くなよなって慰めてたんだけど。

恋に落ちる瞬間ってあるよな。今まで見ていた世界が、急に鮮やかになる。同じ場所にいるはずなのに、一秒前とは全く違った世界になる。

兄貴がさ、俺を見上げたんだ。涙と鼻水まみれの汚い顔で。……その時から、ずっと好きだった。

俺はゲイだと思う。兄貴を好きになっってから女が駄目になった。兄貴を好きなのが嫌で仕方なくて、彼女を作った。一緒にいて和む女子と、一度だけ付き合った。でも、キスをした時に思わず吐いてしまった。もう女をそういう対象としては見られない。

ちなみに本当のファーストキスは小六の時だったということは兄貴には秘密だ。

高校は男っ気の多い学校だったから、五人くらいから告られた。なぜか兄貴みたなタイプにばかり惚れられて、それがなんだか悲しかった。

図書館で高い本棚から本を取り出す姿を見たときはきゅんってなった。ぐでんぐでんに酔っ払った姿を、寝ぼけてだらしない顔を、可愛いと感じた。体が大きいから抱きしめられるとほっとした。

でも、兄貴は女が好きだからというためらいがあったから。まさかキスされるなんて夢にも思わなかったし……。

だから酔ってキスされた時はチャンスだと思ったし、二度された時にはもう止められなかった。

兄弟で恋愛なんてありえないし、やめるべきだと思った。報われないし、人間やめたくなる。たとえ俺たちみたいに上手くいったように見えても、たとえばキスをして兄貴が吐きそうになった時は本当に辛かった。

兄貴から別れたって言われた時は、もう恋人どころか兄弟にも戻れないって死にたくなった。三リットルくらいは泣いたと思う。あのままでは、無理やり襲っていたかもしれない。

兄貴は優しいから、すぐに流される。きっと俺に好きって言ってくれるのだって、ずっとじゃない。泣きたい。引き止められるならなんでもするよ。

始めは普通の人生を送って欲しいと思ってた。なんにも障害のない、ごく当たり前の人生。来年からは兄貴も社会人になるわけだし、身を引けるなら引きたい。俺なんてどうなってもいいからさ。次男は男遊びしててもいいかもしれないけど、長男だから結婚とか大切だろう。

俺は兄貴の道を踏み外させてしまったから、駄目かもしれないけど。でも妹には良い旦那さん見つけて子供作って、幸せになってほしい。

沢山悩んだし、本当に苦しかった。今だって本当にこれで良かったのか分らない。

だけど……せめて今だけは、こうさせて欲しい。

希望

「今日はすごい日だったな……」

ベッドの上で伸びをしながら俺は言った。思い返してみても、色々ありすぎて大変な一日だった。肉体的にも精神的にも疲れているようで、さすがに眠くなってくる。

「だなあ、しゅうちゃん」

弟は泣きすぎて喉が渴いたらしい。絶対にもう二度と、大事なしゅうちゃんを泣かせたくない。強く、そう思う。

甘えてしゅうちゃんが抱きついてきた。なんとなく、くすぐりたいような気恥ずかしいような。でも、そんな由紀がたまらなく愛しい。

「構って欲しいのかよ」

「うん、お願いします」

「じゃあ三秒、目つぶって」

弟は言われたとおり瞳を閉じる。

「しゅうちゃん、大好きだよ。おやすみ」

そう言っ、俺は彼に優しくキスをした。その途端、しゅうちゃんの表情がふわっと笑顔に変わる。

「うん。今日はお疲れ様」

それを見て、思わず強くぎゅっと抱きしめる。あんまり力を入れ

すぎて、「苦しいよ」って苦笑いされてしまったけど。

長かった一日が、ようやく終わった。明日から、俺はまたバイトと大学の、弟と妹は学校の日々が始まる。でも、これからはこれま
でとは違う、新しい毎日が始まるんだ。

いつまでも家族みんな、そして誰よりもゆうちゃんが幸せでいら
れますように……そう心の中で願いながら、俺たちはそのままゆっ
くりと眠りに落ちていった。

あれから俺たちは何度も口付けを交わした。さすがにまだセック
スは出来ないけれども。

男同士であって、兄弟であって。性別の壁を壊して、ようやくひ
とりの人として愛し合おうと思ったら、兄弟の壁があることを再確
認した。あまりの壁の多さに泣きたくなる。

男兄弟で恋愛だぜ？狂ってるよな。でも俺は弟が好きで、弟は俺
以上に俺のことが好きなんだ。

家族愛とかそんなじゃない。倫理観を無視した恋つてのは知っ
てる。兄弟でこんなことしてるのは俺らだけだろうな……。

始めは弟との関係を思い出すたび、気持ちに反して吐いてばかり
だった。こんなにも弟が好きなのに、理性が、体が拒否してた。精
神的にもヤバくて、自分の手首をじっと見つめてる時があった。

実は、弟に別れを切り出した時、ポケットに睡眠薬が入ってたん
だ。駄目だったら死のうと思って。自殺を考えてた俺は、かなり追
い詰められてたんだと思う。

兄弟間で恋愛って難しいよ、死にたくなるよ。でも、支えてくれ
た人たち全てに感謝してる。今はもう、ゆうちゃん、あーちゃん、
母さんを泣かせるようなことはしないって誓う。

弟妹は大切に、兄姉がいる奴らはたくさん甘えておけばいい。ひ
とつ屋根の下で生きてるってとんでもない奇跡だからな。

みんなに、ありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5657m/>

俺は弟に恋をする。

2011年9月18日14時07分発行